

琉球大学学術リポジトリ

運動経験の程度がライフスタイル要因に及ぼす影響
について：高経験群と低経験群との比較から

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 並河, 裕, 小橋川, 久光, 宮城, 政也, Namikawa, Yutaka, Kobashigawa, hisamitsu, Miyagi, Masaya メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1522

運動経験の程度がライフスタイル要因に及ぼす影響について ～高経験群と低経験群との比較から～

並河 裕*・小橋川久光*・宮城政也**

A Study on the Influence that the degree of the Sport Experience exerts on the Life-style Factor.

～A Comparative Analysis with the high sport experienced person group and the low sport experienced person group～

Namikawa Yutaka*・Kobashigawa Hisamitsu*・Miyagi Masaya**

ABSTRACT

The purpose of this research is to verify the influence that the degree of the sport experience exerts on the life-style factor. A questionnaire investigation vote was composed of the fundamental attribute and the life-style factor. The applicable people of the investigation are 120 students who are belonged to the athletic clubs at the university of the Ryukyus. A life-style factor was composed of the item (7 factor) of 23 according to yuppies scale.

A main result is as the following:

1) A significantly difference was recognized between the boy and the girl as a result of comparing a life-style factor by the sex. In other words, a boy was compared with a girl in the personality and the rise intention, and he showed high value significantly ($p < .05$). Furthermore, a girl was compared with a boy in the item about the fashion, and she showed high value significantly ($p < .05$).

2) A sport-experienced person was divided into the two groups to examine the influence for the degree of the sport experience which to exert on the life-style factor. The following thing became clear as a result of examining relation between the past sport experience and the life-style factor. The tendency that a "sport intention" factor score was high was presumed an athlete that it belonged to the sport club at the elementary school ($p < .01$). And, an athlete that it belonged to the sport club at the junior high school showed high value in the factor score such as "real thing intention" ($p < .05$), "brand intention" ($p < .01$), and "successful intention" ($p < .05$).

The athlete that had a rich sport experience in the comparison of the "sport intention" factor score showed a high factor score from these comparative analyses ($p < .01$).

* 保健体育教室

** 沖縄県立看護大学

I はじめに

近年、健康やダイエット等の目的で運動する人々が増加している傾向が見られる。このことは、公園や道路において多くの人たちがトレーニングスーツを着込んでウォーキングをしている様子を見ることによっても理解できる。またスポーツに関する冠をつけた行事が全国的規模で実施されるようになってきた。このように、健康意識の高まりやスポーツイベントの増加に伴って、スポーツ参加人口は増加しているように見える。一方、生涯スポーツの推進に伴って、特にニュースポーツを中心にさまざまなスポーツ実践の形態が見られるようになった。この背景には、スポーツに対する好嫌度や関心さらに運動経験等といった主体的条件が、また近くに手ごろな運動施設があるといった環境条件等が人それぞれ異なっており、人は自分のスポーツ環境に合ったスポーツ行動を選択することに起因する。このことは生涯スポーツの推進といった考え方と一致する。つまりこれからの社会は、自分の意志で、自分の生活に合ったスポーツを実践することが重要なのである。しかし、一方で欧米に比較して定期的に運動を実施している比率はまだまだ少ないのが現状である。

このような現状を踏まえ、スポーツ審議会は10年後には一週間に少なくとも一回は、三十分以上の運動を実施するものが50%になるようにという目標を掲げたスポーツ振興計画を実現可能なものとして打ち出している。さらに文部科学省による総合型スポーツクラブの推進事業においても、サッカー収益を見込んだ、ひとつの中学校区にひとつの総合型スポーツクラブを作ろうという構想が浮かんできている。確かに運動を継続することは、運動の効果を高めるための重要な要因であり、それゆえに運動を継続して実践することを目標に掲げ、かつそのためのスポーツ環境の整備を進めていくことは重要である。しかしその為には、人はどのようなスポーツサービスに対して接近したり逃避したりするのかといった運動者行動を理解することが必要である。言い換えれば、今日の目まぐるしい社会変化の中で、人々の価値観やものの考え方といったものを的確に把握し、スポー

ツマネジメントに生かしていくことが重要なのである。

一方、個人の価値観やものの考え方といったものを正確に把握することは非常に難しい。社会学や経営学の分野においては、ミッシェルら(1987)によるVALS調査や飽戸ら(1985、1989)によるNJWL調査にみられるように、人々の行動原理の把握やマーケティングにおける市場分析等にライフスタイル分析が用いられている。ライフスタイル分析をスポーツ分野に応用したものとしては、菊池(1989)や原田(1990)による民間スポーツクラブ会員を対象とした一連の研究、中年を対象とした岩井ら(1988)の研究、運動者をスポーツ消費者と捉えその類型化を試みた中西ら(1989)の研究が挙げられる。筆者(1996)もライフスタイル要因と運動者の関連性を調べるため、特に大学生を対象に運動部所属者と一般の学生との比較研究の中で、運動者のライフスタイル的特性を明らかにしてきた。しかし日常的に運動を実践しているもの同士によっても、例えば運動経験の豊富なもの少ないものといった違いによっても、その欲求や価値観は異なる、つまりライフスタイル的特性も異なることが推測される。これからのスポーツマネジメントはきめ細やかな対応が求められており、個々の運動者間の特性を明らかにすることは重要な課題である。

そこで本研究では、大学における運動部所属者及び体育系サークルに所属しているものを対象として、小学校から大学にいたる運動部所属経験を基準にグループ分けを行い、ライフスタイル要因との比較分析を通して、運動経験の程度がライフスタイル要因に与える影響を明らかにすることを目的とする。

II 研究方法

1) 調査対象及び期間

本学において運動部及び体育系サークルに所属する120名(男子82名、女子38名)を対象とした。調査期間は平成13年7月から8月にかけて実施した。調査方法は調査票によるアンケート方式で、留置法により、配布回収した。

2) 調査項目

調査項目は、基本的属性および小学校から高校における運動部所属状況とその時の実施種目に関する7項目、ライフスタイルを測定する項目としては、鮑戸らの日本版ヤッピースケール(23項目)を用い、合計30項目で構成した。ヤッピースケールは7つの因子で構成されている。まず他人とは違った生活を望み、しかも個性ある人間として目立ち、注目されたいという「個性化志向」や、本物志向および自然志向と考えられる「本物志向」、そしてファッションを重視し、一流銘柄にこだわるという「銘柄志向」や、スポーツや趣味にこだわる「スポーツ志向」、さらに今の世の中頑張れば偉くなれるといった社会的流動性または上昇可能性を示す「モビリティ信仰」や、より具体的に早く偉くなりたいあるいは出世したいという「立身出世志向」、最後に銘柄志向と本物志向を足し上げたようなものとして「一流志向」といった因子である。また運動部所属の有無に関する項目およびライフスタイルに関する項目に対しては、「はい」「いいえ」の2分応答で回答を求めた。

3) 分析方法

各項目の集計および分析には、Windows版 Spss ver.10.1を用いた。基本的属性とライフスタイルに関する項目との比較分析には、ノンパラメトリック検定による関連の度合いを調べた。さらに運動経験の程度がライフスタイル要因にどのような影響を及ぼすのかを検討するために、ライフスタイル要因は先行研究を参考に7因子としてそれぞれの得点を分析に用いた。つまり各因子に含まれる項目に対して「はい」と回答を得たものに1点を与え、各因子の合計得点を算出し、最終的に7因子ごとの得点を決定した。また運動経験の程度には、小学校から大学まで一貫して運動部に所属していたもの(以下、高経験群とする)とその他のもの(以下、低経験群とする)との2群に分類し、平均値の差の検定を実施した。

III 結果

1. ライフスタイル要因の男女間比較

最初に、男女間に運動部所属経験やライフス

タイル要因に違いがあるのかを検討する。具体的には、性別と過去の運動部所属経験や本研究に用いたライフスタイル要因23項目すべてとのクロス集計によるカイ二乗検定を行った。さらにライフスタイル7因子の得点を性別による平均値の差の検定を行った。

小学校や中学校での運動部所属経験と性別をクロス集計した結果、それぞれの運動部所属経験と性別間に差は認められなかった。さらに高経験群と低経験群とに分類されたものにも男女の比率に有意な差は認められなかった。しかしライフスタイル項目と男女間比較においては有意な差が認められた。その結果は表1-1、表1-2、表1-3、表1-4に示した。ライフスタイル項目3「今の世の中、努力すれば成功できる」という質問に対して「は

表1-1 ライフスタイル項目3の男女間比較

	ライフスタイル項目3		合計
	はい	いいえ	
性別	男性	19	82
		76.8	23.2
女性		17	38
		55.3	44.7
合計		36	120
		70	30

χ^2 値= 5.751 $p < .05$ 上段:実数
下段:比率
項目3: 今の世の中、努力すれば成功できる

表1-2 ライフスタイル項目5の男女間比較

	ライフスタイル項目5		合計
	はい	いいえ	
性別	男性	48	81
		40.7	59.3
女性		32	38
		15.8	84.2
合計		80	119
		32.8	67.2

χ^2 値= 7.309 $p < .01$ 上段:実数
下段:比率
項目5: 他の人とは、一味違う個性的な生き方をしている

表1-3 ライフスタイル項目10の男女間比較

	ライフスタイル項目10		合計	
	はい	いいえ		
性別	男性	35 43.2	46 56.8	81 100
	女性	8 21.62	29 78.38	37 100
合計		43	75	118
		36.4	63.6	100

χ^2 値= 5.111 $p < .05$ 上段:実数
下段:比率
項目10: 早い機会に、世に知られたひとかどの人物になりたい

表1-4 ライフスタイル項目17の男女間比較

	ライフスタイル項目17		合計	
	はい	いいえ		
性別	男性	19 23.5	62 76.5	81 100
	女性	17 44.74	21 55.26	38 100
合計		36	83	119
		30.3	69.7	100

χ^2 値= 5.551 $p < .05$ 上段:実数
下段:比率
項目17: ファッションの為にかけるお金や時間は惜しくない

い」と回答したものが、男性が76.8%、女性は55.2%であり、男性は女性に比べ有意に肯定するものが多いという結果であった。次にライフスタイル項目5「他の人とは、一味違う個性的な生き方をしている」においては、女性の84.2%が「いいえ」と回答しており、男性の59.2%に比べると有意に多いという結果であった。またライフスタイル項目10「早い機会に、世に知られたひとかどの人物になりたい」に対する質問に対しては、「はい」という回答は男性では43.2%、女性では21.6%であり、「いいえ」という回答は男性では56.7%、女性では78.3%であった。このように女性に否定するものが多く見られた。一方ライフ

スタイル項目17「ファッションのためにかけるお金や時間は惜しくない」という質問に対しては、男子は否定（「いいえ」が76.5%）が多く、女性は肯定（「はい」が44.7%）が多いという傾向が認められた。

次にライフスタイル要因を7因子に再構成した因子得点による男女間の差の検討を試みる。表2は各因子の平均値および男女別の平均値を示したものである。7因子のうち男女間に差が認められた因子は、「モビリティ信仰」のみであった。男性は女性に比べ、世の中頑張ればなんとかなるといふ、社会的流動性や上昇可能性に強い意識をもつという傾向が見られた。

表2 ライフスタイル因子得点の平均値および男女別平均値の比較

ライフスタイル因子	各因子の平均値及び標準偏差		性別		P値
			男性	女性	
	M	SD	N=82	N=38	
個性化志向	1.750	1.211	1.817	1.605	
本物志向	0.617	0.881	0.683	0.474	
銘柄志向	0.783	0.918	0.756	0.842	
スポーツ志向	3.183	1.004	3.195	3.158	
モビリティ信仰	2.233	0.911	2.756	2.263	**
一流志向	0.408	0.843	0.646	0.526	
立身出世志向	1.225	0.990	1.902	1.684	

** $p < .01$

2. 運動経験がライフスタイル要因に及ぼす影響の検討

ここでは過去の運動部所属経験がライフスタイル要因にどのような影響を与えるのかを調べるために、まず小学校時における運動部所属の有無および中学校での運動部所属の有無とライフスタイル因子の関係、さらに小学校から一貫して運動部に所属していたものを高経験群、その他のものを低経験群に分け、運動経験の高低によるライフスタイル因子の特性を検討することにする。

1) 小学校時および中学校時の運動部所属経験による比較

小学校時および中学校時の運動経験がライフスタイル要因に与える影響を見るために、7因子を小学校での運動部所属の有無および中学校での運動部所属の有無による比較を行った。その結果は表3、表4に示した。

表3 小学校時の運動部所属経験からみた因子の比較

ライフスタイル因子	所属の有無	N	平均値	有意確率
個性化志向	はい	67	1.746	
	いいえ	53	1.755	
本物志向	はい	67	0.552	
	いいえ	53	0.698	
銘柄志向	はい	67	0.701	
	いいえ	53	0.887	
スポーツ志向	はい	67	3.418	**
	いいえ	53	2.887	
モビリティ信仰	はい	67	2.672	
	いいえ	53	2.509	
一流志向	はい	67	0.537	
	いいえ	53	0.698	
立身出世志向	はい	67	1.866	
	いいえ	53	1.792	

** P<.01

表3から、小学校時において運動部に所属していた経験があるもの（以下、小学経験者とする）と非経験者との間に差が認められたのは「スポーツ志向」因子のみであり、その他の因子には差が

表4 中学校時の運動部所属経験からみた因子の比較

ライフスタイル因子	所属の有無	N	平均値	有意確率
個性化志向	はい	99	1.717	
	いいえ	21	1.905	
本物志向	はい	99	0.535	*
	いいえ	21	1.000	
銘柄志向	はい	99	0.667	**
	いいえ	21	1.333	
スポーツ志向	はい	99	3.232	
	いいえ	21	2.952	
モビリティ志向	はい	99	2.636	
	いいえ	21	2.429	
一流志向	はい	99	0.545	
	いいえ	21	0.905	
立身出世志向	はい	99	1.929	*
	いいえ	21	1.381	

* P<.05

** P<.01

見られなかった。因子得点の平均値で見た場合、「スポーツ志向」における小学経験者の3.418は非経験者の2.887に比べ統計的に有意な高い値を示した。一方中学校時において運動部に所属していた経験があるもの（以下、中学経験者とする）と非経験者との間には、いくつかの因子に有意な差が認められた。まず「本物志向」因子において、中学経験者の平均値は0.535、非経験者は1.0であり、中学経験者が非経験者に比べかなり低い値を示し、統計的に有意であった。同様に「銘柄志向」因子においても、中学経験者の0.667は非経験者の1.333に比べ有意に低い値を示した。しかし「立身出世志向」因子においては、逆に中学経験者の因子得点は非経験者よりも有意に高い値を示した。

2) 高経験群と低経験群の比較

過去の運動経験の程度がその後のライフスタイル要因にどのような影響を及ぼすかを検討するために、小学校から大学まで一貫して運動部に所属しているものを高経験群、その他のものを低経験群とし、ライフスタイル因子を用い差の検定を行っ

た。その結果は表5に示した。

高経験群と低経験群にライフスタイル因子の差が認められたのは、「スポーツ志向」因子のみであり、その他の因子には運動経験の程度による差は認められなかった。「スポーツ志向」因子得点の平均値を比較した結果、高経験群は低経験群に比べ有意に高い値を示した。

表5 ライフスタイル因子による高経験群と低経験群の比較

ライフスタイル因子	運動経験の程度	N	平均値	有意確率
個性化志向	低経験	58	1.707	
	高経験	62	1.790	
本物志向	低経験	58	0.672	
	高経験	62	0.565	
銘柄志向	低経験	58	0.914	
	高経験	62	0.661	
スポーツ志向	低経験	58	2.931	**
	高経験	62	3.419	
モビリティ信仰	低経験	58	2.534	
	高経験	62	2.661	
一流志向	低経験	58	0.707	
	高経験	62	0.516	
立身出世志向	低経験	58	1.793	
	高経験	62	1.871	

** $p < .01$

IV 考察

運動経験の程度がライフスタイルにどのような影響を及ぼすのかを検討するために、本学の運動部および体育系サークルの所属者を対象に、ライフスタイル要因と過去の運動部所属経験の有無との比較検討を行った。本研究では、運動経験の程度を、小学校および中学校、さらに高校での運動部所属とした。つまり小学校から大学にいたるまで一貫して運動部に所属していたものを高い運動経験を有していると規定した。さらにライフスタイル要因としては、若者の価値観や意識を表す指標として用いられている日本版ヤッピースケール

を用いた。一般的にライフスタイルという言葉は生活様式といった比較的個人の日常の生活行動や生活の仕方といった意味で使用されている。村田(1979)によるとライフスタイルの概念は心理学や社会学の分野では異なったニュアンスで用いられているが、次のような合意があるという。ライフスタイルは個人の、あるいは集団の統合機能を指し、独自性、創造性、価値意識、目標志向性を意味し、それぞれの嗜好・選好とそれに相当する選択を通じて、自らの生活を能動的、主体的に形成しようとしている行動主体があると述べているように。人々の生活様式はその人の価値観やものの考え方といったものに強く影響を受けると考えられる。本研究ではライフスタイル要因をその人の価値観やものの考え方といった生活意識として捉えている。

1. ライフスタイル要因の男女間比較

小学校から中学校にかけての運動部所属経験に男子と女子の間に差は見られなかった。ライフスタイル要因からみた男女間の比較においては、いくつかのライフスタイル項目に有意な差が認められた。「今の世の中、努力すれば成功できる」(項目3)、「他の人とは、一味違う個性的な生き方をしている」(項目5)、「早い機会に、世の知られたひとかどの人物になりたい」(項目10)といった、自己の個性や社会的流動性、さらに上昇性を示す内容のものに、女子に比べ男子が高いという傾向が認められた。逆に「ファッションのためにかけるお金や時間は惜しくない」(項目17)では、男子に比べ女子のほうが高い傾向を示した。これらのことは競技スポーツの領域においては、従来の性役割意識の存在がみられるのではと考えられる。つまり生涯スポーツの進行が叫ばれ、幼児から高齢者、男女を問わずスポーツ人口が増大している一方で、競技スポーツにおける女子の進出は目覚ましいものがあるが、運動部活動といった競技性の強い集団では男子と女子の差が身体的な面も含め意識面においても見られるようである。次にライフスタイル因子別に男女間の差を検討した結果、「モビリティ信仰」因子のみに有意な差が認められ、男子は社会的流動性や上昇可能性を女子よりも強くもっている傾向が認められた。この

ことは上述のライフスタイル項目分析の結果とはほぼ一致している。

2. 運動経験がライフスタイル要因に及ぼす影響の検討

過去における運動部所属経験の有無、さらにこれらを基にした高経験群と低経験群との分類を使って、「個性志向」、「本物志向」、「銘柄志向」、「スポーツ志向」、「モビリティ信仰」、「一流志向」、「立身出世志向」といった7つのライフスタイル因子との比較を行った結果。

1) 小学校時および中学校時の運動部所属経験の有無による比較

小学校時の運動部所属経験からみたライフスタイル因子の比較では、「スポーツ志向」因子に、小学経験者が非経験者よりも高いという傾向が認められた。つまり小学校での運動経験が、スポーツが好きあるいは趣味であるといったスポーツに対する肯定感を強めるように影響を及ぼしていたと考えることができる。

次に、中学校時の運動部所属経験によるライフスタイル因子を比較分析した結果では、「立身出世志向」因子において中学経験者の方が非経験者よりも強い意識をもつ傾向が認められた。つまり中学校での運動経験が社会において努力すれば成功するといった上昇可能性といった意識を高めるのではないかと考えられる。一方で、「本物志向」因子や「銘柄志向」因子においては、逆に中学経験者よりも非経験者が有意に高い因子得点を示した。これらの因子は、比較的現代若者の特徴をよく表す因子であり、スポーツに没頭する若者とスポーツを楽しむに行っている若者との違いを表す因子とも考えられる。これらのことから、中学校における運動経験は、上昇可能性といった「立身出世志向」に関する意識を高める方向に影響を及ぼすと考えられるが、一方で現在の若者の特徴である「本物志向」や「銘柄志向」を抑える傾向があるのではないかと推察できる。

2) 高経験群と低経験群の比較

高い運動経験を有しているものと、運動経験が少なくと考えられ実際に大学で運動部活動を行っ

ているものとの、ライフスタイル要因による比較を行った結果。7因子のうち高経験群と低経験群との間に有意な差が認められたのは「スポーツ志向」因子のみであった。高経験群は明らかに低経験群に比較して、スポーツに対して肯定的であると言える。「スポーツ志向」因子は、スポーツが好きであるといった好き嫌い、また日常的にスポーツを実践しているといったスポーツの継続性、さらにスポーツで疲れた体をスカッとさせるといったスポーツの効果といった内容で構成されている。この結果から、運動経験の程度によるライフスタイル要因への影響は、スポーツに対する肯定的志向性に働いていることだけは確認された。その他のライフスタイル因子に差が認められなかった理由としては以下のことが考えられる。本学の学生をみると、小学校から高校までの運動経験者はかなりの数がいると考えられるが、実際に運動部に所属して活動するものは少ないと考えられる。高校までは一生懸命競技スポーツに没頭しているが、大学に入ったとたん運動部活動を停止してしまう。しかし、スポーツ自体は好きなので地域や仲間を集めて続けているという現状である。つまり大学に進学し運動部に入学してスポーツを行うもののライフスタイル特性は比較的単一の構造をもっているのではないかと推測される。また今回対象としたサンプルには運動部所属者と体育系サークル所属者が含まれており、それらをまとめて高経験群と低経験群に分類し分析に用いたことにより、それぞれの差が相殺される方向に働き結果的に差が生じなかったのではないかと考えられる。このことは今後の課題である。

V まとめ

大学運動部及び体育系サークルに所属するものを対象に、運動経験の程度がライフスタイル要因にどのような影響を及ぼすのかを、小学校および中学校での運動部所属経験の有無、さらに運動経験を高経験群と低経験群との2グループに分け、比較分析を行った。その結果は以下のとおりである。

1. 男女別に、本研究に用いたすべてのライフスタイル項目を比較した結果、男子は、自己の個性

や社会的流動性及び上昇可能性といった項目に、女子に比べ肯定するものが有意に多いことが確認された。一方、女子は男子に比べファッションに関する項目に高い頻度を示した。これらのことは競技性を持つ運動集団においては、従来の社会的役割としての性役割的な存在の可能性を示しているのではないかと推測される。次にライフスタイル7因子を男女間で比較した結果、「モビリティ信仰」因子のみに有意な差が見られた。男子は社会的流動性や上昇可能性意識が女子よりも強いという傾向が認められた。

2. 小校および中学校での運動部所属経験とライフスタイル7因子との関連を調べた結果、小学校での運動部所属経験者は「スポーツ志向」因子得点において非経験者よりも高い傾向が認められた。また中学校での運動部所属の有無による比較では、所属経験者は「立身出世志向」因子が高く、非経験者は「本物志向」、「銘柄志向」に対して高い因子得点を示した。このように、小学校や中学校での運動部経験がライフスタイル要因に及ぼす影響には、それぞれ異なった特徴が見られることが明らかになった。

運動経験の程度からみた高経験群と低経験群との比較分析の結果、「スポーツ志向」因子のみに有意な差が認められ、その他の因子に差は認められなかった。高経験者は低経験者に比べ「スポーツ因子」得点が高い傾向が認められ、豊富な運動経験がスポーツを肯定的に捉える志向性を高める方向へと影響することが確認された。

今後の課題

今回、大学における運動部所属者を対象に、過去の運動経験とライフスタイル要因との関連を検討してきた。その結果、ライフスタイル要因の男女差や、高経験群か低経験群かによる、ライフスタイル要因に運動経験が及ぼす影響の違いなどが明らかになった。しかし、今回はサンプル数が少ないため比較できなかった、運動部所属者と体育系サークル所属者のライフスタイル要因の特性を検討する必要がある。大学卒業後、競技的あるいはレクリエーションのスポーツであれ、その人の価値観や意識が運動形態の選択に影響することは

否定できない。それ故、運動部所属者と体育系サークル所属者の比較分析が今後の課題である。また質的側面から捉えるためにライフスタイル要因と運動経験との関連を検討してきた結果、従来、量的に捉えられてきた運動経験にも、何らかの質的指標を用いる必要があるのではないかと感じた。このことも今後の課題である。

参考文献

- 鮎戸 弘 (1986) 日本的ヤッピーの実証的研究. 消費と流通 10 (2) : pp 13-32.
- 鮎戸 弘 (1985) 消費文化論～新しいライフスタイルからの発想～. 中央経済社 : pp 3-32.
- 鮎戸 弘・松田義幸 (1989) ゆとり時代のライフスタイル. 日本経済新聞社 : 東京, pp 39-50.
- 荒井貞光 (1982) 現代人のスポーツ行動に関するスポーツ社会学的分析と考察～成人スポーツ集団参加の分析から～. 広島大学総合科学部紀要Ⅱ社会文化研究 10 (2) : pp 165-201.
- 原田宗彦・菊地秀夫 (1990) スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究. 体育学研究. 35 : pp 241-251.
- 岩井浩一・大山良徳・山下秋二 (1988) 中高年のライフスタイルと健康に関する研究～健康のためのスポーツ・運動の取り組み～. 大阪大学健康体育部紀要. 第3巻 : pp 67-73.
- 菊地秀夫・原田宗彦 (1989) 民間スポーツクラブ会員のライフスタイルの構造～性差と結婚の有無による差異について～. 鹿屋体育大学研究紀要. 第4号 : pp 97-107.
- 久保良敏・長町三生・片岡晃 (1977) 現在学生のライフスタイルに関する研究. 実験社会心理学研究 17 (1) : pp 60-73.
- 村田昭治・井関利明・川勝久編著 (1979) ライフスタイル全書～理論・技法・応用～. ダイアモンド社 : 東京 pp 13.
- 中西純司・浪越一喜 (1989) ライフスタイル・セグメンテーションにみるスポーツ消費者の実証的類型化. 体育・スポーツ経営学研究 6 (1) : pp 22-35.
- 中野次郎訳 (1984) ヤッピーハンドブック. ダイアモンド社
- 並河 裕 (1996) ライフスタイル要因からみた運動経

並河：運動経験の程度がライフスタイル要因に及ぼす影響について

験者に関する研究～過去の運動経験とライフスタイル要因との比較～. 琉球大学教育学部紀要 48 : pp 303-313.

並河 裕 (2001) ヤッピースケールからみた運動経験者の特性に関する研究. 琉球大学教育学部紀要 58 :

pp 77-83.

ミッチェル・吉福伸逸監訳 (1987) パラダイム・シフト～価値とライフスタイルの変動期を捉えるVALS類型論～. TBSブリタニカ.